かささぎ通信　第113号

毎月第2金曜日 13：30～15：30　　2022年　4月　8日　発行

刈谷市中央図書館研修室　参加自由　　森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二二年三月「森三郎の作品を読む会」では、「夕顔物語」の読み比べ（『赤い鳥』[1936.8]と少国民文芸選『かさゝぎ物語』([1942.8]帝国教育会出版部）をしました。その後「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」（『うぐひすの謡』[1943.8拓南社]所収）を読みました。

「夕顔物語」は湖のほとりに住む若者（於之乃美・おしのみ）と白鳥との異類婚姻譚です。婚姻のきっかけは白鳥の尾の黄金の羽を於之乃美に取られたことによります。そこに三つの難題がつきつけられ、その解決のために白鳥の姉が援助者になりますが、最後には白鳥は羽を取り返し、二人の間にできた子供を置いて飛び去って行くという話です。湖の岸辺に咲く夕顔に優しく語りかけるようにしていた白鳥を見て、於之乃美は子どもが夕顔になったことを悟ります。読者は物語の最終場面でやっと、この話の題名「夕顔物語」の由来が、於之乃美と白鳥との間に生まれた子どもの生まれ変わりにあったことに気づきます。

難題を持ちかけてきたのは、腹黒い村長とその妻で、於之乃美夫妻を村から追い出そうとします。それも於之乃美の妻の美しさをねたんだ村長の妻の頼みによるものでした。二回目までは白鳥の姉によって救われますが、三回目の難題は於之乃美が自ら立ち向かわなくてはなりませんでした。白鳥の姉は、命を落としそうになる於之乃美を薬草で救ってくれ、いわばそれと引き換えに黄金の羽を取り返して元の姿に戻った妹の白鳥ともども飛び去って行くのです。

これは昔話や民話の題材を使った話です。森三郎には類似のモチーフの話として『赤い鳥』(1931.12) の「かささぎ物語」（「かささぎ通信」第一〇八号参照）や、四月の「読む会」で扱う『赤い鳥』(1932.6) の「虹の松原」があります。「かささぎ物語」はハーンの中国の話の翻案です。「虹の松原」は三郎の創作と思われますが、全てを夢の中の話としています。『赤い鳥』(1936.8) の「夕顔物語」は、この頃童話の執筆を休んでいた三郎が久しぶりに発表した作品で、より創作性が増していると思われます。

今回（A）『赤い鳥』と（T）帝国教育会出版部『かさゝぎ物語』所収作の「夕顔物語」を読み比べてみると、（A）では母親が一緒に住んでいましたが、（T）は初めから母親のことには触れていません。そのことによる不都合はなく、他に目立つような改作もありませんでしたから、本作は『赤い鳥』に掲載した時点で、三郎自身でかなり推敲した自信作だったのだろうと推察されます。

次に読んだ『うぐひすの謡』(1943.8拓南社) 所収の「曼珠沙華（まんじゅしゃげ）」は三郎自身の「あとがき」によれば、「近松の『釈迦如来誕生会』に暗示をうけて書いたもの」です。三郎の読書の幅を感じます。また、実際に文楽を観たのかもしれないという想像もできます。この話は、厳重な警護をかいくぐって悉達太子が婆羅門の修業のために金泥駒に乗って城を出る場面を、門番の男の立場から描いています。

さて先号でもお知らせしました「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』第5号の中の「鈴木三重吉から森家への書簡と刈谷の名産『白魚』」について反響がありました。

「森三郎刈谷市民の会」の会員でもある竹中良枝さんから碧南市棚尾の妙福寺境内にある句碑の紹介がありました。

白魚の漁り火となん雪の中　鈴木花蓑（はなみの）

花蓑（一八八一－一九四二）は高浜虚子の門人でホトトギス同人。句友の招きで棚尾町に立寄ったりすることがあり、碧南の句を多く残しているそうです。碧南の地にもかつて白魚漁の漁り火が見えていたことが分かります。

次回予定　二〇二二年五月十三日（金）午後一時半～三時半
「蛙（かえる）」の読み比べ（『赤い鳥』と少国民文芸選『かさゝぎ物語』）／「向日葵（ひまわり）」（『うぐひすの謡』1943年所収）